1980年代の日本のダンス・パフォーマンスに関する一研究
～ダンサーの「役割」を視点として～

西　名　糸　江

【研究目的】

本研究は，1980年代の日本のダンス・パフォーマンスの共通した傾向を探ることを目的としたものである。

【研究方法】

1. 方法

ダンス・パフォーマンスの名称を用いている舞踊家の中から，継続して作品発表をしている点，またその活動が高い評価を受けている点から,1980年代の日本のダンス・パフォーマンスを代表する舞踊家として，加藤みや子，菊地純子，江原朋子，田中泯，米井澄江の５人を研究対象に選んだ。そしてこの５人の舞踊家たちにインタビューを行なうとともに，本研究者の作品分析だけでなく，新聞・雑誌等に掲載された作品批評文をも援用した。

2. 手順

本研究では彼女らの共通した傾向がダンサーの「役割」にあると仮定し，２つの段階を踏んで考察を進めた。

まず第一に，アーヴィング．ゴッフマンの『行為と演技』を中心に日常生活における「役割」について考察し，次にその考察に基づき，８つのパフォーマンスの側面と印象操作の技法という視点から，５人の舞踊家の作品に出演しているダンサーの「役割」について考察した。なお今回はダンサーの素養，創作過程，ダンサーの意識の３点に注目した。（下表参照）

その際クラシック・バレエやモダン・ダンスを比較対象として用いている。

Ⅰ　日常生活における「役割」
　◇８つのパフォーマンスの側面
　◇印象操作の技法
Ⅱ　ダンス・パフォーマンスにおけるダンサーの「役割」
　◇８つのパフォーマンスの側面
　　・ダンサーの素養
　　・創作過程
　　・ダンサーの意識
　◇印象操作の技法
　　・ダンサーの素養
　　・創作過程
　　・ダンサーの意識

【結果・考察】

Ⅰ　日常生活における「役割」

ゴッフマンによると「役割」とは，ある地位に結びついた義務と権利の実行であり，役割遂行のために人々はパフォーマンスをし，さらに印象操作の技法を駆使しているということであった。

そのパフォーマンスには８つの側面（①人の演じている役目への信頼，②外面，③劇的具象化，④理想化，⑤表出的統制の維持，⑥偽りの呈示，⑦神秘化，⑧リアリティーとたくらみ）があり，印象操作の技法には，３つの措置（防衛的措置，保護的措置，察しの察し）があると述べられている。

これらの役割行為の重要な属性を視点として，日常生活の役割行為を具体例に沿って考察した結果，上述の役割の諸属性が否定された行為は，行為主体の個体性が強調され，行為主体の代替が不可能であることが導き出された。本研究では，その個体性の強調および代替の不可能性をもって「脱役割」と呼ぶことにする。

Ⅱ　ダンス・パフォーマンスにおけるダンサーの「役割」

ここでは８つのパフォーマンスの側面と３つの印象操作の技法を視点として，ダンス・パフォーマンスにおけるダンサーの役割を，ダンサーの素養，創作過程，ダンサーの意識の３点から考察した。なお本研究は行為主体であるダンサーの役割研究であるため，印象操作の技法に関しては，行為主体側の措置である防衛的措置のみを視点としている。

◇パフォーマンスの側面◇

・〈ダンサーの素養（形姿およびバレエ・テクニック）〉

５人の舞踊家の作品に出演しているダンサーたちは，社会一般に理想とされているダンサーの形姿やバレエ・テクニックに固執していない。つまりバレエのように細身で手足の長い形姿，バレエ・テクニックの習熟という，１つの価値観によって作り上げられた外面の表出にとらわれることなく，自分にとっての美しさ，独自の表現テクニックを追求している。自分自身が理想とする外面を作るのであって，既成の外面を選択するのではない。ここでは特に②外面および④理想化の否定が見られる。

・〈創作過程〉

５人の舞踊家の創作は，その舞踊家自身とダンサーの共同作業で進められている。舞踊家はダンサーに状況や条件を提示し，ダンサーはその課題に対して自らの動きで反応し，対応していくことを課せられる。ダンサーは，細かく定められた振りの再現ではなく，自分の表現が望まれているの

で，⑥偽りの呈示は不必要であるし，即時的な反応であるので自己の動きに整合性を持たせるといった⑤表出的統制の維持も無用のこととなる。また上演も創作過程の延長上にあり，過程の一地点といった趣が強いため，局域の分離という⑦神秘化のパフォーマンスも見られない。

・〈ダンサーの意識〉

上演の際ダンサーは，本来的な自己を追求し，自己の呈示に意識を集中させており，役柄を演じることに没頭していない。これは①人の演じている役目への信頼の否定になる。彼女らは何かの役柄を通してではなく，むしろ日常でもかぶっているような仮面を外し，演技的要素を剥ぐ方向へと進んでいる。したがって役柄に⑧リアリティーを持たせるために③劇的具象化をし，自己に⑤表出的統制の維持を施す，あるいは作品のため，役柄のために⑥自己を偽った呈示をするという必要に迫られない。

◇印象操作の技法◇

・〈ダンサーの素養〉

5人の舞踊家の作品においては，クラシック・バレエや多くのモダン・ダンスのように1人のダンサーの形姿が違うことや，バレエ・テクニックの仕損じが，チーム・パフォーマンスの撹乱を誘うことはない。むしろその人固有の形姿や表現テクニックが望まれており，すなわちゴッフマンの言う「自分自身のショー」の呈示こそ必要とされている。そこに防衛的措置は見られない。

・〈創作過程〉

前述の共同作業の中で，5人の舞踊家たちはディスカッションという過程を踏んでいる。このことは作品にダンサー個々人が強く反映していることを意味する。すなわちダンサーは作品に従うのではなく，そこに参加するダンサーが作品を作りあげていると言える。さらに参加しているダンサーは設定された状況に反応するという自己呈示作業を行なっているので，忠誠心や節度を持って与えられた振りの再現をする必要はない。まさにここでもゴッフマンの言う「自分自身のショー」の呈示が見られる。

・〈ダンサーの意識〉

5人の舞踊家の作品に出演しているダンサーたちは，作品の印象を強化するために役柄を演じ切るのではなく，ダンサー個々人が自分を見つめ，呈示していくために舞台に存在している。そこではパフォーマンスの撹乱も一つの状況として受け止められ，ダンサーはその状況にどう反応して動くかが問われている。すなわちパフォーマンスの撹乱を回避するために節度を持って定められたとおりに動くという，チーム・パフォーマンスに対する忠誠心＝印象操作の技法である防衛的操置は無用のものであると言える。

【まとめ】

以上のように，ダンサーの素養，創作過程，ダンサーの意識の3点において，5人の舞踊家の作品では，パフォーマンスの側面の否定と印象操作の技法の否定，つまり役割の属性の否定がみられる。すなわちダンサー1人1人の個体性が強調され，さらにダンサーの代替が不可能であることが窺える。

この個体性の強調と代替の不可能性をもって，5人の舞踊家の作品に出演しているダンサーたちは，パフォーマンスの側面および印象操作の技法という視点から見て「脱役割」の志向を持った自己呈示をしていると言える。すなわち1980年代の日本のダンス・パフォーマンスは，「脱役割」の志向を持つという結論に達した。

【主要参考文献】

＊アーヴィング・ゴッフマン著　石黒毅訳
『行為と演技』　誠信書房　1974

＊アーヴィング。ゴッフマン著　丸木恵祐，本名信行訳　『集まりの構造』　誠信書房　1980

＊芦原英了　『バレエの歴史と技法』　東出版　1981

＊市川雅　『行為と肉体』　田畑書店　1972

＊市川雅　『舞踊のコスモロジー』　頸草書房　1983

＊小倉重夫　『白鳥の湖の美学ー作品の背景と実践』
春秋社　1968

＊ゲルハルト・ツアハリアス著　渡辺鴻訳　『バレエ形式と象徴』　美術出版社　1965

＊週刊オン・ステージ　週刊オン・ステージ新聞社
1979～1989

＊旬刊音楽舞踊新聞　音楽新聞社　1986～1989